

氏 名	石 井 千 鶴
学 位 の 種 類	博 士 （音 楽）
学 位 記 番 号	博 音 第 183 号
学位授与年月日	平 成 22 年 3 月 25 日
学位論文等題目	〈作品〉十世杵屋六左エ門 「翁千歳三番叟」 〈論文〉囃子の視点による《京鹿子娘道成寺》の楽曲研究
論文等審査委員	
（総合主査）	東京芸術大学 教 授 （音楽学部） 三 浦 正 義
（副査）	〃 准教授 （ 〃 ） 小 島 直 文
（ 〃 ）	〃 〃 （ 〃 ） 牧 真 弓
（ 〃 ）	〃 教 授 （ 〃 ） 塚 原 康 子
（ 〃 ）	〃 准教授 （ 〃 ） 杉 本 和 寛

#### （論文内容の要旨）

本論文では《京鹿子娘道成寺》の囃子について考察を行う。能楽に由来する手組については現行の手組と能楽囃子の手組とを比較する。能楽以外の芸能からきた囃子に関しては、その由来について歴史的資料を用いて検討する。また、現行の手組とその曲中での使われ方を明らかにする。それにより楽曲の成立当時の囃子方による工夫の内容や効果を理解することができると考える。今日の邦楽囃子を形作っているものが何であるかということに迫りたい。

本論で《京鹿子娘道成寺》（以下《娘道成寺》）を取り上げたのは、歌舞伎舞踊を代表する曲であり、トタン拍子とチリカラ拍子が偏りなく含まれるからである。曲の主題を能楽から取っているが、松羽目ものにせず原曲から離れ、華やかな舞踊と音楽で構成されている。囃子も能楽の《道成寺》を思わせる手組が一部に見られるが、そのまま移入した部分は少ない。移入の際の変化に着目することで、邦楽囃子の独自性が浮かび上がると考える。

実際に能楽囃子の演奏家に話を伺い、ほんのささいな、掛声や表記の違いを始め、楽曲の捉え方が異なっているといった本質的な違いまでも再確認することになった。能楽では、淡々とした音や演技の積み重ねを十分に行い、その上で劇的な変化を短く効果的に行う。能楽に携わるものはその積み重ねている一見静かな部分を大事にし、愛着を感じているともいえると伺った。そうしたことは、序破急といった言葉を用いて一般にも語られることであるが、あらためて邦楽囃子との性格の違いを感じた。例えば本曲の始まり方にしても、「花の外には松ばかり」と核心に近い部分から始め、能楽囃子にあるその前の部分を使わない。芝居の場合もおかしみに満ちた所化の間答を入れ、そこにもみどころをつくる。そうした、歌舞伎をはじめとして邦楽囃子の工夫が随所にみられた。

#### （総合審査結果の要旨）

##### （演奏）「翁千歳三番叟」

長唄曲中、最も荘重なもので重厚な貫禄の中に品格が求められ唄、三味線、囃子とも最高の技量を要する難曲とされている。翁の件はともすればばらつき易いものであるが、頭取として氣息を整え両脇鼓をよく統率、整然とした演奏は力強ささえ感じられた。揉み出しの打ち出しに少々走った感があったが、鈴の段、結びまで華やかな中に緊張感を保ち、若々しく清楚な演奏であった。しかし普段のさえた小鼓

の音色は聞かれず精神的にゆとりに欠けたのか、乾燥のせいなのか、楽器への配慮は今後の課題である。

**（論文）『囃子の視点による《京鹿子娘道成寺》の楽曲研究』**

本論文は1752年（宝暦2）に初演以来、未だに人気の衰えない歌舞伎舞踊「京鹿子娘道成寺」の楽曲を邦楽囃子の視点より考察したものである。

内容は申請者が博士リサイタルで演奏した（“道行”“押し戻し”部分を割愛）形式を中心に邦楽囃子の視点より幾つかのブロックに分割、その事由を分析し、手組の由来と素因、及びその創造性を追究している。また新しい試みとして乱拍子を時間波形により視覚化、芸能形態、演奏者の流儀による違いを精査して邦楽囃子の独自性を捉えようと努めた。しかし乱拍子は元来、西洋音楽的な拍子感、休止感で捉えるものではなく、最小限の動きや音の中で生まれた緊張感の表現であり、乱拍子の根底に流れる真意の追究には至らず未消化に終わった感も否めない。

初演以来260年という再演の歴史を考える時、楽曲の変遷の中で囃子が果たした役割は本論文にも散見されるものの、現行の楽曲を考察する上でより重要な論点であり、集約した項目を加えるべきであると考えている。

申請者自身の演奏経験をもとになされた本論文は「京鹿子娘道成寺」の新たな研究資料として、その意義を評価し、演奏、論文ともに博士課程にふさわしいと判断、合格とした。